

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第785号 平成26年8月12日

死に損ない

今年の5月、修学旅行で長崎市を訪れていた横浜市の公立中学校3年生の男子生徒数人が、被爆者の語り部として活動している森口貢氏（77歳）に「死に損ない」等と暴言を吐いたという話は全国ニュースにもなり、大きな波紋を呼んでいます。

森口氏や学校の話によると、問題発言は、中学3年生119人が班ごとに分かれ、森口氏等が所属する「長崎の証言の会」9人の案内で被爆遺構である山里小学校を訪れ被爆体験を聞いている際、森口氏に向けて発せられたものです。

問題発言をした中学生は、暴言を吐く前に森口氏から態度の悪い事を咎められ、出て行くよう注意されており、それを逆恨みしての事だったようです。

暴言を吐かれた森口氏は、その翌日学校側に抗議し、校長が謝罪するという事態となり、それが全国に報道されたものです。

長崎原爆被災者協議会では年間600回程証言活動をしているそうですが、集中しない生徒はいても、邪魔された事はなかったそうです。また、当協議会の山田事務局長は「自ら学ぼうという気持ちが足りなかったのでは」と述べているようですが、一部の生徒とはいえ、心無い行為に対して、非常に残念に思っています。

今回の事態に関しては、学校側の対応が果たして十分だったのかどうか、私は多少疑問を感じています。

引率の教師は複数いたと思いますが、それら教師の皆さんは生徒達をどのように把握し、統率していたのでしょうか。また、会場で席を離れたり、私語をしたりといった態度の悪い生徒に対する指導は、どのように行っていたのでしょうか。

見て見ぬ振りをしていたとは思いませんが、しかし、森口氏が自ら生徒に注意しなければならぬ程生徒の態度に問題があったとすれば、今回の事態を防げなかった要因として、引率教員の目配りや生徒指導の不十分さを指摘せざるを得ません。

また、生徒達の被爆遺構の見学や体験談を聞く際の態度が悪い、集中しないといった問題については、学校における事前の学習が適切だったかどうか検証する必要もあると思います。

被爆者から直接お話を聞く事の意味、更には、お話を聞く際の態度等についてしっかりと事前学習をしておく必要があります。こうした事前学習はどここの学校でも行われていますが、それが形式に流れていないか見直す必要があるのではないでし

ようか。

私は、言葉には魂が宿っていると感じています。だから、自分の口から発せられる言葉は、聞く人を勇気づける事も、また、傷つける事もある事。場合によっては死に至らしめる場合のある事を、子ども達には十分理解させる必要があると思っています。

私が幼い頃、友達とケンカして「お前の母さん、でべそー」と悪口をいいあった事を思い出しますが、「死に損ない」という暴言を吐いた生徒も、恐らくはそんな程度のノリだったのかも知れません。

今の中学生にとっては、太平洋戦争はもとより原爆も、ほとんど現実感のない話だと思います。だから大した考えもなしに「死に損ない」という言葉を吐いたのだと思います。しかし、仮にも、東日本大震災の際、命からがらやっとの事で助かった人に向かって「死に損ない」とは、口が裂けてもいえるはずはありません。今の中学生だって、そんな事は十分理解出来るはずです。そういう意味では、学校現場においても、もっと現実感のある命の教育を実践して欲しいと思っています。

さて、今回の暴言問題の当事者である森口氏に関して、長崎に原爆が投下された際、彼は佐賀県に疎開しており、被爆者ではないのに、被爆者として語り部をしているのは問題ではないかといった声や、語り部の多くが、被爆体験というより特定の思想を披歴しているのは問題ではないか、といった声がネットで流されています。

森口氏は、8歳の時に入市被爆したとされており、その意味では被曝者といえますし、仮に、そうでなくても、原爆の遺構や被害の状況を語る事に問題があるとは思えません。語り部の役は被爆者以外はすべきでないといい始めたら、やがて原爆投下による凄まじい被害について語る人はいなくなってしまう。

なお、語り部の皆さんが、それぞれの戦争体験や被爆体験とは関わりのない、特定の思想に関わるような話をしているのではないかという批判については、私は実態を承知していませんので、論評は控えますが、仮にも、修学旅行で訪れた中学生に対して、語り部の方々が、ご自身の戦争体験や被爆体験とかけ離れた特定の思想を披歴しているとするれば、修学旅行の場としては相応しいとは思えません。ただこうした問題は、例えば、語り部はどの様な話をするのか等、事前に学校の方で修学旅行先の事前調査をしっかりと行い、修学旅行先として相応しくないと思えば、旅行先を変えるとといった配慮をすれば防ぐ事が出来るはずです。

修学旅行は、子ども達にとっては中学校時代の思い出作りの場に過ぎないのかも知れません。しかし、修学旅行は、旅行先で今まで触れた事のない世界を見聞したり、見学先の人々との触れあいを通じて、それぞれの地域の文化や習慣を体で感じ取る事が出来る等、普段の学校生活では経験出来ない、非日常的な貴重な時間です。また、集団で行動する際のマナーや社会のルールを実践的に学ぶ大切な場でもあり

ます。

各学校におかれては、子ども達にとって、大人になってからもずっと心に残る、充実した修学旅行となるように、事前の準備と生徒に対する指導に万全を期して欲しいと思っています。（塾頭：吉田 洋一）